

「～吾が故郷は上桜田地区の
寺社シリーズ No 9～
「 耕源寺 （2） 」

回
覧
⑩

今回は、曹洞宗「神龍山耕源寺（武田淳光住職）さん」に係る事を取り上げ、その2回目です。
関係する面白い事の2題に焦点を当て見ます。

1. 当寺の移転騒動について

（1）知り得た過程

先月の1回目で取り上げた内容に関心を持ち、いろいろと聞き取りをして行く中で、「昔の事だが、耕源寺は今とは違う別の所にあった、移設して現在位置にある。」と云う話を聞いた事から、その経緯に興味が湧いて少し探って見ました。平成24(2012)年のある日、当町内会のA・Mさんにお邪魔した時に、その移転に係る古文書の存在を教えられました。

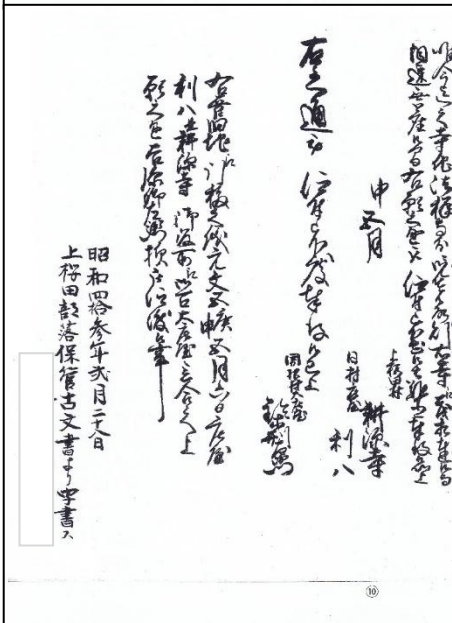
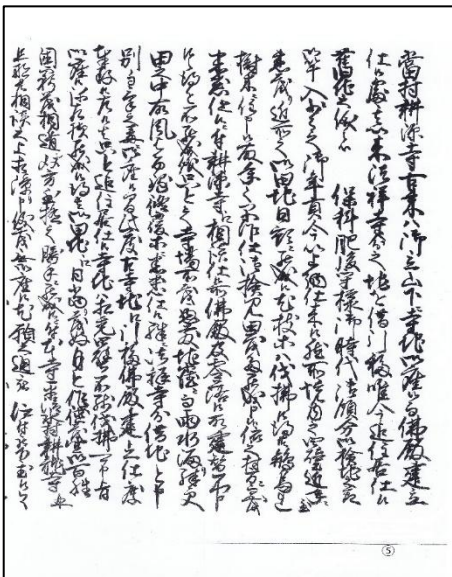
（2）古文書内容の骨子



図－1

まずは、ここで分かった事を一言でいうと次のとおりである。以前（江戸時代の頃）の耕源寺は、図－1と通りの現在の県道53号沿いの太子殿がある所にありました。元文五（西暦1740）年―江戸時代中期―に、地元の村代表が「郡奉行」に対し、本寺の移転並びに境内の伐採に関する申し立てを行い、そして、そのとおり適った、というものであります。しばらくして、前出A・Mさんの先祖の故A・Dさんが書き写した古文書

（巻物状）「上桜田村耕源寺旧地へ引き移し建て替えに付き差し出す絵



図－2

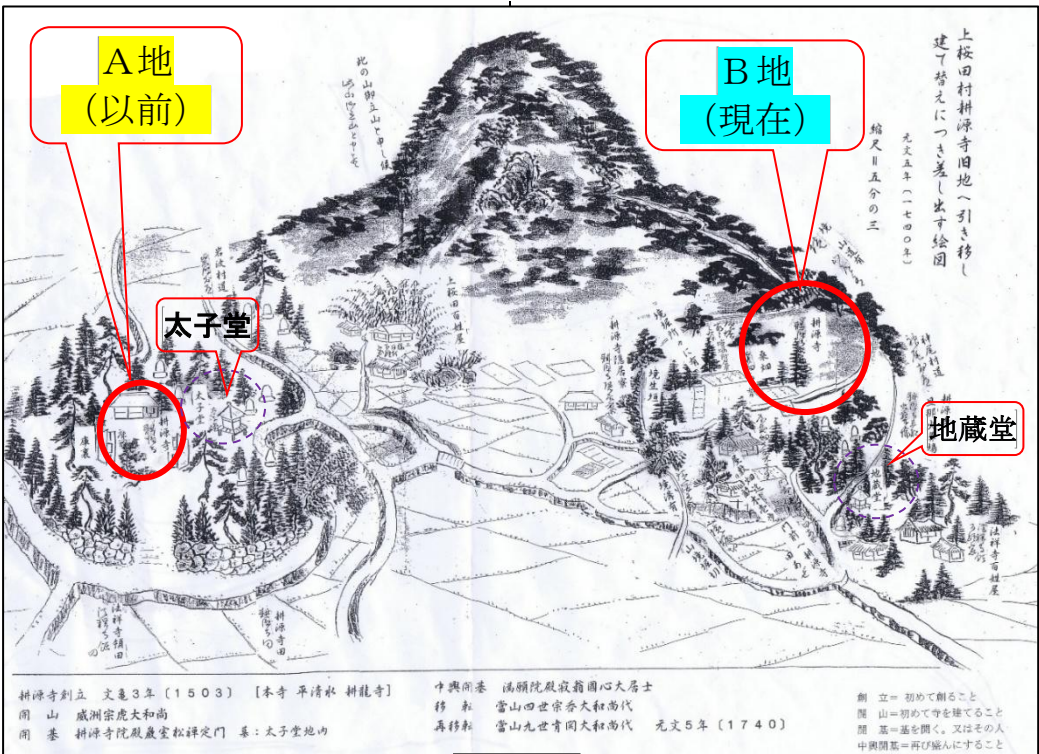
は、同図下に依れば、上桜田公民館の金庫に保管されていた、とあるが、現時点では確認出来ていない。 その古文書に添付されいるのが、図－3のと通りの古絵図である。同図は、「吾が故郷は上桜田地区の寺社シリーズ『No 3 太子殿』、『No 5 地藏堂』」に於いても記載しました。

（3）事の顛末

その後、当地のある方が口語体に訳したという書面に会った。前記古文書の直読は、浅学菲才の私には出来ないので大いに助かりました。私は、同文書に書かれている動きを移転騒動と称している、同文書は5通の書面で構成されており、事の全体像を総括的に、時間軸に推測も交えて要約すると、次のような事が窺えます。

その1：最初の文面に記された関係者

最初の願い書文面の最後に記載した陳情者と関係者の氏名は次のとおりである。



図－3

図並びに願いの書」を見せて貰いました。図－2は故A・Dさんの古文書写書きのコピーである。なお、同図上は書き始めであり、同図下は書き終わりである。同図下に依れば、昭和四十三年二月二十八日に書き写した、とあります。大変貴重な資料であり、只々達筆に驚愕するばかりであります。なお、同古文書の原本

元文五年申四月（西暦1740年）

上桜田村百姓

長助、四郎次、清次右衛門、清助、甚 六、伝右エ門、茂兵衛、左次兵衛、左兵衛、五兵衛、十右エ門、太郎兵衛、九右衛門、伊三郎、徳兵衛、伝十郎、甚左衛門

同村組頭 伝助

同 断 勘四郎

同村庄屋 利八

右の通り仰せ下されたく奉り候

以上

関根村大庄屋

鈴木刑左衛門

その2：寺の移転（図－3参照）

○ 創立（開山）の頃は、寺（大仏殿・本堂）はB地にあった、しかし墓はA地にあった。

○ その後、寺（本堂）をA地に移転した。

○ その寺が衰退していった。

○ これらを解消するために寺（本堂）を元のB地に移転する事を部落の総意として、今で言う陳情運動を展開した。寺の移転であるから、本来は、寺側だけが動けば良いが、年貢米との係りから部落の総意としたのではないか？

○ そして、元文五（1740）年に、寺は、願いのとおり、元のB地に再

2016(平成28)年9月15日

上桜田町内会長

移転する事が出来た。

その３：A地境内樹木の伐採等

- 寺境内の樹木が繁茂し、隣接地・周囲の田んぼが日陰に成るに至、米の不作が懸念された。
- 鳥獣が住み着いて、もみ（米）をついばむなど稲作に悪さをするようになった。
- 従って、境内の樹木を全て伐採して、きれいさっぱりとする事により、周辺の田地は日当たりが良く成り、かつ鳥獣が住み難い環境にしたい、となった。
- そして、元文五（1740）年に、願いのとおり、伐採する事が出来た。

（４）昔を偲ばせる写真

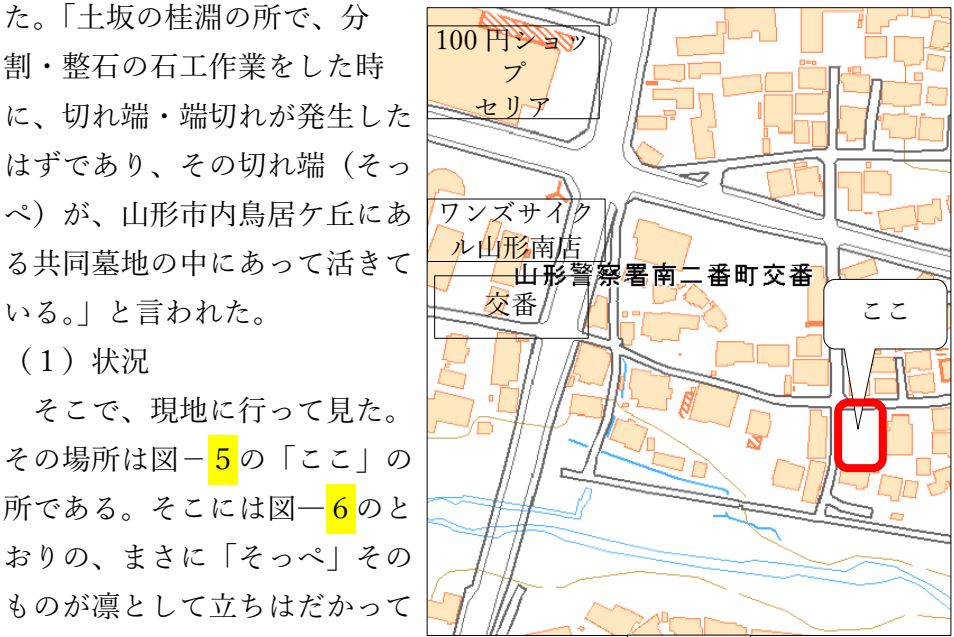
図一 **4** は当町内会のO・Kさんから提供して頂いた明治 43(1910)年頃の写真。前記の通りの明治 40(1907)年に建立した正門の石門柱が見える。本堂の当りの様子は今に繋がる風景であるが、下部道路沿いには立派な民家と小屋が見えます。また、右側中央部には、今は切株だけが残っている杉の大きな木が見えます。この写真は、図一 3 の時代と現在の中間の存在となり、とても貴重なものであります。

2. 耕源寺石門柱のそっぺについて



図一 4

まさに想定外の事が起こった。当初、耕源寺の石門柱の大きさと刻字の内容のみに興味を持って右往左往していたが、平成 24(2012)年 4 月 23 日（月）前出土坂の J・Kさんに会った時に、「そっぺがある！」と教えられた。「土坂の桂淵の所で、分割・整石の石作業をした時に、切れ端・端切れが発生したはずであり、その切れ端（そっぺ）が、山形市内鳥居ケ丘にある共同墓地の中であって活きている。」と言われた。



図一 5

（１）状況

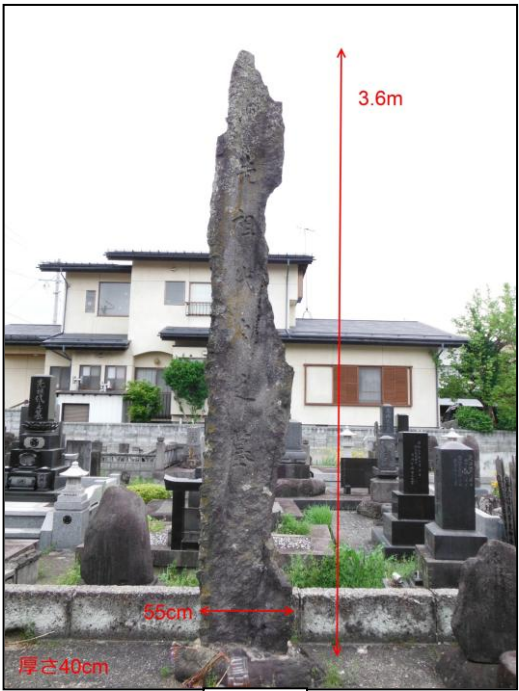
そこで、現地に行って見た。その場所は図一 **5** の「ここ」の所である。そこには図一 **6** のとおりの、まさに「そっぺ」そのものが凜として立ちはだかっていた。地上高 3.6m ほどで、正面（西向き）には、大きな字で「先祖代々の墓」と刻字されている。周辺の住宅環境や他の墓石から見て、真に異様な感じがする。図一 **6** の下部を拡大すると、図一 **7** のとおりで、原石分割の際の ^{くさび} 楔・^{たがね} 鑿を打ち込んだ角状のへこみの跡（→の所）がはっきりと残っており、へこみは石門柱にもあり、大きさは同じである。

非常に不安定に見えるが、ここに於いても、昭和 39(1964)年 6 月 16 日の新潟地震や平成 23 (2011)年 3 月 11 日の大地震が襲っているが、被害はまったく無かったという。私の現地確認でも、ずれたりしている形跡がまったく見当らない。

（２）この墓の縁者

やがて、この墓は、山形市南二番町岡崎充男さん（オカミツ不動産社長）が所有者だと判明した事から、平成 24(2,012)年 12 月 22 日（土）午後、本人に対面した。初対面ながら快く対応して頂き、先祖の家系も調べて貰った。伺った事などを要約すると次のとおり。

- 「上桜田耕源寺の正面の石門柱の建設工事に係り、先代の親族が人夫の取り纏め役をしていて、そのご褒美としてこのそっぺを与えられたと先祖から聞い



図一 6

ている、この墓石建立に係った当時の人は長蔵と云い 2 代目であった、私は 5 代目である。」

- 本墓石の北側面には、『明治三十七八年戦役凱旋記念、此墓ヲ設立ス、同四十年七月一日、勲七等 岡崎長蔵』と刻字されている。「岡崎家の初代・岡崎孫左エ門まで遡って、家族関係を追って行くと、孫左エ門の長女・たけさんの夫となったのが下桜田の吉田惣吉の二男・留（留）吉さんであった。」

（３）耕源寺正門の石門柱のそっぺと本墓石の関係性

この留（留）吉さんは、先月発行の「耕源寺（１）」に於いて取り上げた、耕源寺正門の石門柱——明治四十年四月十九日建立——に刻字されている土方の岡崎留（留）吉さんである。孫左エ門の二男・長蔵さん（充男さんの直系 4 代前）こそが、このそっぺ墓の建立者ということである。したがって、岡崎留（留）吉さんと岡崎長蔵さんは義理の兄弟であった。義理の兄貴となっている留（留）吉さんは、本家方義兄の長蔵さんの墓の建立計画に賛同し、本寺石門柱建立の土方（土工）責任者になっていた事から、ご褒美という名目で「そっぺ」（切れ端）を丹野安太郎さんから譲り受けて、それを長蔵さんに渡して、長蔵さんが建立したものと思われる。このような経過から、耕源寺正門の石門柱のそっぺが本墓石であることが証拠付けられた、と判断している。



図一 7

（４）共通性

両方とも明治三十七・八年の日露戦争に係り、石門柱は亡くなった戦没者の慰霊碑であり、方や「そっぺ」は生き返って来た凱旋者の生還記念碑で反対の関係にある。

石門柱の寺は曹洞宗（道元）、そっぺ墓石の菩提寺は浄土真宗（親

鸞）であるが、宗祖の道元・親鸞共に比叡山は延暦寺で修行している。
そして、石門柱と墓石は元々は一つの石であった。

【編集後記】

- ・ 岡崎充男さんを初め、お話を聞かせて下さった皆様、資料を授けてくれた皆様に衷心より感謝申し上げます。今回取り上げた思いがけない2点については、どこか清々しさを感じています。
- ・ 「吾が故郷は上桜田地区の寺社シリーズ」として、五つのお堂・お社と、月山神社を2回、耕源寺を2回に分けての合計9回に亘り、本年は平成28年1月より毎月15日に定期発行して来ました。限られた紙面の中で上辺^{うわべ}だけの内容になったが、関心をお持ちの皆様方に対し、何かの参考になれば幸いです。
- ・ 寺社シリーズは今回を以って一区切りとします。
- ・ 私は歴史の専門家でもなく、個人的趣味の範疇であり、会社の間違いがあるかもしれません。気付いたお方は、ご自身の頭脳明晰を以ってご自由に解釈、判断させてください。

以上

（上桜田町内会 総務担当 大沼香）